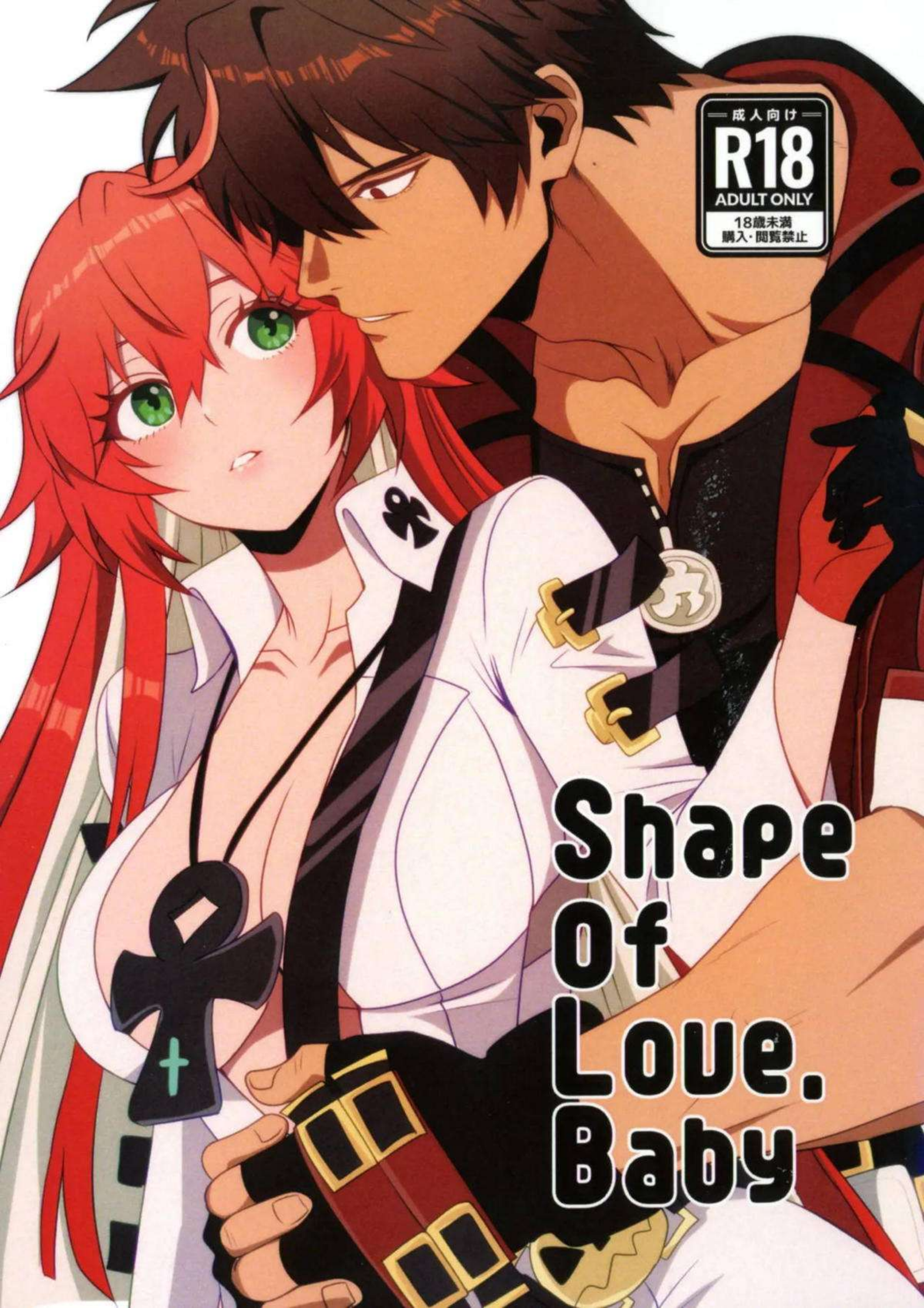


— 成人向け —
R18
ADULT ONLY
18歳未満
購入・閲覧禁止

Shape Of Love. Baby



GuiltyGear
Unofficial
fanbook #11

Sol(Frederick)
×
Jack-o



子供達が来ると
時間が一瞬で
溶けるわね

シンは
相変わらずの
調子だし

ユニカも
今ではかなり
寛いでくれる

毎日手合わせに
付き合わされる
身になってみる

野生児が二倍で
しつこさも二倍
おちおち本も
読めやしねえ

そりゃあ
お父さんの遺伝
でしょう

貴方と力いっぱい
戦えることが
嬉しくて仕方ない
家系なのかも

貴方も子供達に
付き合うの
好きでしょ？

生活に
メリハリも
生まれるし

お互い
MINWIN
よね

次は私達が
お城に遊びに
行くのも





…2人きりも
久しぶりね



一週間か
そこら程度
だけ

正確には
一週間と
三日だ



ゴキウッ

良い……



悪いことは
ないけど？

悪んだよ
か

俺でも
こういう日
はある



待ちきれなく
なっちゃった？





がっつき
過ぎなのよ
欲しがりさん



お前も
人のこと
言えんのか



もう少
見たか
ったの
に

あとで
風呂場
で
見せて
やるよ

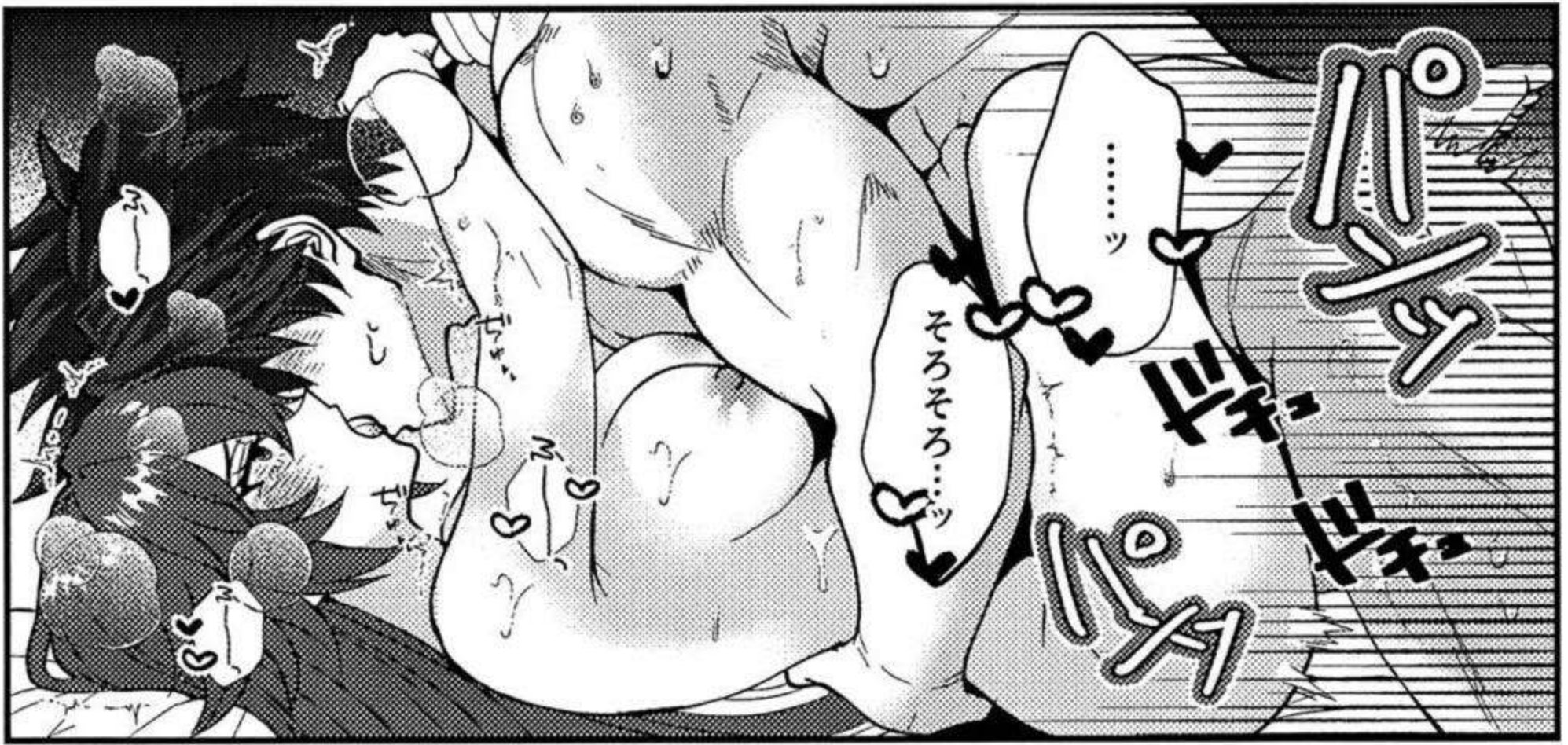


それ
は
否定
し
ない
けど















……
そうね
必要よね



何れ
子供部屋は
必要にاندらろ



2人以上の
生活も絶対
楽しいわ



貴方も
そういうこと
考えて
くれてたんだ

……まあ
そりやな

お前の体の
負担優先
だが

それは
心配すぎ



あと事前に
必ず食育の
勉強をして
もらうから

いやあれは
状況の問題
がだ……



……とはいえ
もう少しだけ

2人きりを
楽しませよ

フレデリックとの
初めての寝屋事…

もっと緊張
するかと
思っていたけど…

フレデリックは
まるで真綿を
包むように扱って
くれる…

でも

優しすぎて
もどかしい
iiiiiii!!

でも、恥ずかしくて
言えない

あ？

でも、今は…

もっと、して
なんて…

知ってる
なんだ？
いきなり

バッドガイな
貴方が私だけに
優しい時間を…

フレデリック…
好きよ♡

堪能しよ♡

^^♡

もじもじ

もじもじ



時間軸的にはDRの最終決戦～最終話の間の話のつもりで描いています。とにかくDRの時間軸の後。シンが気軽にイゼオに遊びに来ている事実がすごい嬉しくて妄想がずっと捗っています。大きなイゼオの家を二人だけで使ったら部屋余ってるだろうなあ→シンがよく遊びに来てるからシン用の客間もあつたりして→でもいずれ家族が増えた時用なのかもなどといった連想ゲームで生まれたお話です。子供と絡んでるときのフレデリックさんってなんてあんな良い出汁が取れるんでしょうね。可愛いね。

以下はゲスト寄稿頂いた玖珠さんと梅沢さんのコメントです。大変叡智な寄稿を頂きありがとうございました！

◆玖珠(@kusu26moosky)さん

いつもお誘いいただきありがとうございます。今回ページ数があんまり自分の方でかけられなかったのであつまあまな一幕という感じになってしまいました。少しでも楽しんで頂けたら幸いです。どこまでジャックちゃんに甘々のフレデリックさんでいてくれ。でもこの後狼に…フスフス ありがとうございます！！！！

◆梅沢(@umehasubarashi1)さん

umeさんの同人誌に寄稿させていただけたこと、心より光栄に思います！この場をお借りしてお礼申し上げます！今回は妊活をどすけべに書きたいと突き詰めた結果、ジャックちゃんがめちやくちやに種付けされる話となりました。書きたい衝動に任せて筆を走らせるうち、自分でも驚くほど、心身ともに満たされていく感覚がありました。やはりソルオーは健康に良い…。改めまして、素晴らしい機会をありがとうございました！

蜜壺に溶けて

梅沢

世界の滅びの危機を幾度も越え、三度目にイゼオの自宅へ戻った頃、慎ましくも規則正しい生活が始まった。

日が昇り始めると、フレデリックがジャック・オーを起こし、朝食を作る。ジャック・オーの当番の日には、その役目が逆になる。

昼には、昨夜のうちに仕込んでおいた料理を並べ、二人で食後のコーヒーを嗜む。そして夜には、軽い夕食と晩酌が始まる。

そんな日々に、ジャック・オーがほんの少し退屈を覚え始めた頃のことだった。

フレデリックは手にしたカップを口に運ばず、ゆっくりと口を開いた。

「……子どもは、好きか？」

思わず「なにそれ」と吹き出しそうになったが、真剣な眼差しと、わずかに紅潮した頬を見て、抑揄う気にはなれなかった。

子ども。その言葉を聞いて、ジャック・オーはこれまでの記録を思い返す。ゆつくり考える時間など、これまで一度もなかった。ジャック・オーとして人生を始めても、二度の世界崩壊の危機

に見舞われ、それどころではなかったのだ。これから先、同じことが起きないとは限らない。

いや、とジャック・オーは頭を振る。先のことばかり考えて不安になるのは悪い癖だ。そつと視線を上げると、フレデリックは無言のまま、ただ答えを待っている。

「……ええ。あなたとの子どもなら、誰よりも偏屈で、とっても可愛いでしょうね。」

「偏屈は余計だ。」

フレデリックは小さく息を吐き、胸を撫で下ろした。そしてコーヒーを一口で飲み干すと、再び黙り込む。

唇が何かを言いかけては閉じられ、室内には時計の針の音だけが響いた。

ジャック・オーは静かに立ち上がり、フレデリックの頬をそつとなぞった。

言葉が何であれ構わない。そんな気持ちで彼の唇に触れると、フレデリックはその指を掴む。

「……これから先、一息つける時間がいつまで続くかわからない。だから、今のうちに形を作っておきたい。……俺たちの家族を。」

そうやって、彼は「妊活」という言葉を口にした。そこから先の記憶は、どこか霞がかっている。体が硬直し、妙に熱を帯びたこと。そして、フレデリックの視線が熱を孕み、真っ直ぐに自分を射抜いていたことだけを覚えている。

逃げたい。抱かれない。怖い。愛されたい。相反する感情がぐるぐると渦巻く中、ジャック・オーの口から出た言葉は、あまりに頼りないものだった。

「そ、それは……いいけど……。」

「けど？」

「少しずつ……慣らして、くれないかしら。」

「……いつもやってるだろ？」

「そうじゃなくて！ えっと……心の準備というか……いきなり妊活スタートっていうのも……。」

フレデリックは納得のいかない顔で眉間に皺を寄せた。

だが、ジャック・オー自身はその言葉を口にしてから、少しだけ安心している自分に気づいた。

心の準備は、確かに必要だ。

いつものように彼のペースに飲み込まれるのではなく、自分からも歩み寄りたい。

「た、たとえば……五日間かけるとか！」

「なんだそれは。」

「だって、いつもあなたのペースで、気づいたら終わってるんだもの。……私も、あなたとちゃんと触れ合いたい。」

自分でも恥ずかしいことを言っているとわかっていて。

けれど、フレデリックが頬をわずかに赤らめたのを見て、胸の奥が温かくなる。

「……それでいいんだな？」

ジャック・オーがこくりと頷くと、フレデリックは掴んだままの指先に、そっと口づけた。

◇ ジャック・オーが口にしたその提案は、どうやら「ポリネシアン・セックス」と呼ばれるものに近いようだった。

自分でも驚くほど、口走った内容はその概念と酷似していた。初日は、裸で見つめ合うだけ。それならば、落ち着いてできるかもしれない。

ジャック・オーは小さく息を吐き、シャワーのバルブを閉めた。濡れた体をタオルで拭き、髪をドライヤーで乾かす。この時間が早く終わってほしいような、永遠に続けばいいような。そんな相反する思いに、思わず苦笑が漏れる。

「シャワーを出たら、服は着るな。」

先に浴室に向かったフレデリックがそう言ったのを思い出す。その言葉通り、彼も衣服を纏わぬまま寝室へ戻ってきた。ちらりと視界の端に映った彼の身体から、逃れようのない現実味が立ち上がる。これから起こることが、もう想像ではない。そう思った瞬間、ジャック・オーの背筋に震えが走った。

乾きすぎた髪に熱がこもり、慌ててドライヤーのスイッチを切る。いつもならパジャマを身につけるところだが、今夜ばかりはそうはいかない。

目を閉じ、「どうにでもなれ」と心の中で呟き、ジャック・オーは寝室へと歩を進めた。

「……何か、言ったらどう？」

顔が熱くなるのを隠そうと、つい棘のある言い方になってしまふ。

申し訳なさを覚えながらも、撤回の言葉は出てこなかった。おずおずとベッドに腰掛けるフレデリックへ近づくと、彼はゆっくりと手を伸ばし、ジャック・オーをその腕の中に引き寄せた。

「そういえば、明かりのある場所で見るのは初めてだな。」

言われてみれば、確かにそうだった。

二人の同棲生活が始まったあの時でさえ、ジャック・オーの身体を気遣って、フレデリックはいつも明かりを落としてくれた。

あれからもう一年が経つ。時間の流れの早さに、思わず胸が詰まる。

彼の言葉に小さく頷いたその瞬間、ふとルールを思い出し、目を見開いた。

「フレデリック、だめよ。今日は触れ合うのも禁止なんだから。」

チツと舌打ちが聞こえる。

ジャック・オーはいそいそとベッドに横たわり、フレデリックも渋々とその隣に身を沈めた。

とはいえ、何もしない時間というのは、思いのほか落ち着かない。

「フレデリック、ロケットのエンジン部分、そろそろ完成しそう？」

耐えきれずに口をついた言葉は、どう考えても色気の欠片もない。

案の定、フレデリックは目を丸くし、すぐに苦笑した。

「ああ、一年かけただけの成果は出たな。年末までには、動作の確認もしないとな。」

いつもの調子で話すその姿が、裸であることを忘れさせるほど自然で、そしてどこか滑稽だった。

「あ、ちよつと。手を繋ぐのもダメだったら。」

「これぐらい、いいだろ。減るもんじゃねえし。」

思わず「おっさんみたいな言い方」と口にしかけたが、その手のぬくもりに、力を抜くことができなかった。

繋いだ手に汗が滲み、ジャック・オーはぼつりと口を開く。

「ねえ……ここに住み始めてからも、いろいろあったでしょ？」

「いろいろつてのは、世界の崩壊の危機か？ それとも王様一家の厄介ごとか？」

「ふふ、それもあるけど……私が言ってるのは、私たちのことよ。」

ジャック・オーは、彼の方へと身体を向けた。赤い髪が肩をすべり、胸をかすめ、ベッドに落ちる。

フレデリックの視線がそこに吸い寄せられるのを感じながら、ジャック・オーは静かに語り始めた。

「二人でバカンスに行ったでしょ？それに、私の誕生日のとき、友達に聞いていろんなものを買集めて、全部プレゼントしてくれたじゃない。それから、ハロウィンには二人でお菓子を作ったりもした。」

握られた手に、ジャック・オーはそつと力をこめた。

「私、とっても楽しいの。だって、あなたとずっと一緒にいられるんだもの。これからも、きつと最高なんだと思う。」

フレデリックは目を閉じ、その声音を楽しんでいるようだった。

「……もし、私たちの子どもがいるのなら、もっと楽しい日々になると思うの。だから……あなたの言葉、嬉しかった。」

ありがとう。そう呟くと、フレデリックは得意げに鼻を鳴らした。

その仕草が可笑しくて、ジャック・オーは思わず彼の唇に口づけた。

「……ルール違反だろ？」

「ふふ、もうルール違反はなしね。」

そう言ってから、二人は天井を見上げた。繋いだ手のぬくもりが心地よく、言葉を交わすうちに、ジャック・オーはいつの間にか微睡に落ちていた。

◇

二日目は、軽いキスとスキンシップ。

「一緒に風呂へ入るくらい問題ないだろう」と、フレデリックにうまく丸め込まれたジャック・オーは、結局、その強引な提案に抗えず、身体を洗わせることもしぶしぶ承諾した。

「洗うだけだからね。」

「わかった、わかった。」

鼻歌混じりに、フレデリックはジャック・オーの髪を泡立たせた。自分よりも力強い指先のせいで、頭皮マッサージのようだ。そのくすぐったさにくすぐすと笑うと、何かおかしいのかと不安げにジャック・オーの顔覗く。

「大丈夫、大丈夫よ。」

「嘘じゃないだろうな？」

まだ笑うジャック・オーにフレデリックはムツと口元を曲げながらも、シャワーで丁寧に髪を解し、泡を取り去る。

彼の指先は、ジャック・オーが近頃気に入っている蜂蜜の香りポディソープへ触れた。泡立たせたそれを、彼に比べると幾分も

小柄な体へ滑らせる。強く触れられてはいないのに、滑りを帯びた彼の指先が、裸体をなぞっているのだと思うと、緊張が込み上げる。

強張った身体を弛緩させるように、フレデリックは首筋に口付けた。手はやがて首、胸元、乳房、そして臍へと降りていく。あ、と口を開ければ、その吐息を飲み込むようにキスが落ちる。かくりと脚の力が抜け、フレデリックの前面に寄りかかる。そうすれば、彼の昂りが背に伝わった。

「……私も、洗ってあげる。」

「お手柔らかにな。」

「ふふ、何それ。」

フレデリックの方へ振り向けば、まだ洗い流したばかりの髪が無造作に後ろへ流れ、珍しくオールバックめいて見えた。

ボディソープを手に取り、泡をいくつか押し出す。指先を彼の胸元へ滑らせると、わずかに熱を帯びた肌が応えた。彼と出会ってから、まだ数年にも満たない。けれど、彼が生きてきた一世紀の歳月は、その身体に確かに刻まれている。治癒力の高い肉体ではあっても、幾度も傷を負えば、再生の跡がわずかに歪み、膨らむ。その痕跡が、静かに語っていた。

「じっくり見られると、恥ずかしいもんだな。」

「いつものお返し。」

ジャック・オーはつられて笑い、シャワーを少し当てて泡を立てる。筋肉で盛り上がった身体は、洗い甲斐がある。届かない背中のはつま先立ちで、洗うときには彼に後ろを向いてもらった。

やがて、ジャック・オーは意を決したようにしゃがみ、下腹部に泡を滑らせる。固く引き締まった腰、逞しい太腿、手早く脚全体に泡を広げる。その間も、ジャック・オーの視線は彼の昂る陰茎から離れなかった。

こくりと喉を鳴らす音は思いのほか浴槽に響き、フレデリックは笑った。

「それは、また後日だな。」

シャワーを手に取り、フレデリックは二人分の泡を洗い流し始めた。甘く濃厚な蜂蜜の香りに包まれ、二人はまるでその中に沈んでいるかのようなだった。濃密な香りに、フレデリックは思わず眉をひそめた。

「明日もこの状態は続きそうだな……、誰にも会わずに済むと

いいんだが。」

それは、匂いのせいなのか、秘め事のせいなのか。考える間もなく、フレデリックはジャック・オーを抱きかかえ、浴槽に浸かった。

ザブリと湯が溢れ、排水溝へと流れていく。足先からじわじわと熱が広がり、その刺激にジャック・オーは思わず吐息を漏らす。フレデリックもまた、同じように息をついた。

尻に感じる強張りは消えない。ただ、いつもなら羞恥と興奮に苛まれるそれも、今は彼女を圧迫するものではなかった。ジャック・オーはゆつたりとした気持ちで、フレデリックに体を預ける。浴槽には、湯が滴り落ちる音だけが響く。自分と彼の熱が溶け合う感覚に、ジャック・オーは目を閉じた。

◇

三日目には、深いキスもできるようになった。その日は夜を待たず、朝からフレデリックの口付けを受けていた。

朝食の準備中、後ろから忍び寄る唇。庭に降りた時。昼下がりのコーヒータイム。時間が進むにつれ、二人の口付けは深く、長くなっていった。

今は、夕食後の晩酌の時間。普段ならソファに並んで座り、流れるラジオにフレデリックが小言をつけるのだが、今日は違った。ジャック・オーはソファに押し倒され、そこからずっと彼の

体重を感じながら、口付けを受け続けていた。身動きは取れず、熱く強張ったフレデリックの体が、絶え間なくジャック・オーの腹に擦り付けられる。

以前なら「ちよつと待って」と慌てただろう。しかし今は、それが当然のことのように思えた。

定めた五日間のルールのせいだろうか、彼との接触が何もかも心地が良い。もつとその先へと、焦る気持ちが止まらない。フレデリックが漸く口を離せば、二人の口元に液が伝う。二人の体が過剰に熱を持っている事に、フレデリックも気付いているだろう。

そのまま、彼は首元に顔を埋めた。荒い息が耳を掠めるたび、背筋が震える。フレデリックの限界が近いことは、背や腰をなぞる指先の熱でわかった。

とはいえ、ジャック・オーも冷静ではなかった。自分の呼吸も早まり、きつと彼の耳にまで届いているだろう。脈打つ彼の太腿に、思わず自分の脚を擦り寄せてしまう。

「……っ、明後日までの、我慢よ。」

「……ああ、分かってる。」

お互いに、かろうじて理性を擦り合わせる。

やがてフレデリックは、堪えきれないように身体を起こし、

「少し外に出てくる」とだけ言い残して寢室から出ていった。その切羽詰まった姿に、思わず笑いが込み上げる。けれど、自分の熱もどうにかしなければならぬ。

ジャック・オーは立ち上がり、冷たいシャワーを浴びようと浴室へ向かった。

◇

四日目は、愛撫の日である。その日、フレデリックは王都に呼ばれており、帰りが遅くなっていた。

シャワーを浴びた後、ジャック・オーはおろし立てのベビードールに袖を通す。それは王道のデザインで、白のレースと細い紐だけで形を成していた。肝心なところを隠すどころか、むしろ隙間の多さが肌を強調している。乳房も尻もほとんど露わで、かろうじて薄いレースがそれを縁取っていた。

今朝、フレデリックは出かける前に、「ベッドで待っている」とだけ言い残した。その言葉通り、ジャック・オーはシーツの上で身を横たえている。

昨夜の予熱はまだ体の奥に残り、冷たいシャワーでも流れ落ちることもなかった。しとどにジャック・オーの秘部は濡れそぼり、乳房は冷気に固く張り詰め、乳頭は固く隆起している。どこもかしこも熱く、いつそジクジクとした痒みに変わるほどであった。

今、この手で触れたらと、指先を布越しに秘部に這わせる。軽

く押せば、すぐにでも絶頂に達するほどの刺激がジャック・オーを襲った。唇を噛み締め、横に転ぶ。

ああ、早く来てほしい。でなければ、この身が理性を保てず、恥を晒してしまう。いつそ、一人でこの熱に沈んでしまおうか。いや、それでは駄目だ、彼と共に溺れたい。相反する思いが胸の内を絡み合い、どちらも同じ欲の底に沈んでいく。

ほんの少しだけ。そつと、トロトロに濡れ滴る入り口を指でかき分け、その奥へ差し込もうとした時、荒々しいドアの音が響いた。

慌てて身を起こす頃には、寢室の扉は開いていた。

「っ、フレデリック！……あ、服……。」

「……気にするな。もう無理だ。」

乱闘でもあったのだろうか。フレデリックの髪には砂埃がつき、胸元には擦り傷が見えた。それでも痛みを感じている様子はなく、お気に入りのジャケットもノースリーブのシャツも、乱雑に脱ぎ捨てる。そして、ブチリという音とともに、ベルトごとパンツを引き剥がした。

きつと、ベルトは壊れたな。そんなことを頭の片隅で思いながら、ジャック・オーは陶然と笑みを浮かべ、両腕をフレデリックの背に回した。

彼の香りをじつくりと感じたかったのに、ジャック・オーはすぐさまベッドに押し倒される。慌ただしい彼の手つきはピタリと止まり、代わりに粘つく視線がジャック・オーの肢体に注がれる。

二人の間に会話もなく、漏れ出る吐息が重なれば、後は水音が響き始めた。

よく似合っている。忙しなく身体に落とされる口付けの合間に、フレデリックはそんなことを言う。

そうでしょ？返答の代わりに彼の身体に自身を擦り合わせ、両手で彼の下腹部を弄った。フレデリックもまた、そこをしとどに濡らしていた。指先で滑る先端を軽く撫で回せば、食いしぼる音が聞こえる。そのまま猛る幹を手で扱けば、脈動がすぐに伝わった。

余裕を失ったフレデリックを見るのは、少し愉快だった。けれど、その油断の報いはすぐに返ってきた。

「っ、あ！だめ……！っ、ひっ、ああっ！」

彼の無遠慮な手が乳房を揉みしだき、片方の手はすぐさまにジャック・オーの秘部に突き立てられた。

びくびくと、抑えきれない震えが、フレデリックの陰茎を握る手にも伝わる。たちまちそこは白濁液を噴き出した。ドクドクと収縮するも、強張りが緩むことはない。フレデリックは気にせ

ず、指先を最奥へと滑り込ませた。

彼の大きな手は容易に奥のしこりを小刻みに揺らす。途端に身体に息の募るほどの快楽が迫り、ジャック・オーもまた、言葉を漏らすことなく絶頂に身を震わせた。

二人の荒い吐息が混ざり合う。足りない、全然足りない。身体に染み渡る焦燥感とは裏腹に、心は充足感に満ちていた。笑みを浮かべ、額を擦り合わせる。口付けを交わし、また、どちらとも促すことなく互いの陰部を撫で、扱き、擦り合わせる。

何度、頂に上り詰めただろうか。触れてるあちこちから溶けてしまっている感覚にジャック・オーは目を細める。息も絶え絶えに、フレデリックの胸元に顔を擦り付けていると、頭上からああ、と喜色に満ちた声が届く。

「なんだ、もう十二時か。……ってことは、もう五日目って事だよな？」

ジャック・オーの顎を手で支えられ、壁時計の方へ無理に向けられる。視線の先の針は、確かに真上を指していた。

コクコクと頷けば、フレデリックは口角を上げる。

「なら、もう……いいよな？」

フレデリックは白濁液に塗れた陰茎を握ると、そのままその

先でジャック・オーの秘口をなぞり上げる。

ああ、もう最終日なのか。

「うん……っ、え、……あーあああつー！……だめえ、っ！……！」

頭の中によくフレデリックの言葉が届いた時、慌て始めるジャック・オーに構わず、膣内は剛直に満たされた。

プシュリと、重なり合ったそこからは弱々しい飛沫が漏れ出る。やがて、飛沫は何度も吐き出されていた白濁液と共にシーツを汚していく。明日の洗濯は大変な事になるという思考は溶け落ち、ジャック・オーは、シーツが互いの粘液が汚れていく様を夢であるかのように眺めた。

フレデリックは最奥へ、しきりに子種を擦り付ける。彼の剛健な身体に見合う絶倫ぶりが加速しているようだった。彼の逞しい脚は、ジャック・オーを逃がさないようにと彼女の太腿ごと挟んでいた。そのまま覆うように身体を倒しているから、ジャック・オーはひたすらに、種付けされている事以外身動きを取ることはできない。絶え間ない絶頂の中、それでも抱きしめたいと、彼の首元に腕を回す。快楽の中に全て放り込まれないようにとの抵抗であったが、接合部から何度も噴き出す水音に溶けていく。

やがて、律動は揺籠のように穏やかな、大きな波のうねりに変わっていった。普段の性行為による過度な快楽による恐怖はな

く、自身を包み込む真綿のような快楽に、ジャック・オーは震えていた。

「あ、すき、っ、フレデリック、すき、……っ、すきよ。すき……っ、あ、きもちい……。」

同じ言葉を繰り返すジャック・オーに、フレデリックはようやく顔を上げ、口付けを落とした。舌を絡ませ合い、ゆつくりと身体を揺する。

幾時間、同じ事を繰り返したのだろうか。視界がぼんやりと滲み、輪郭が識別できなくなった頃、ふと視線の端に橙色の日差しを見つけた。

綺麗。そう呟くことはできなかつた。混ざり合い、輪郭も失われた熱情の中で、ジャック・オーは微睡に囚われた。

◇

当然のことではあつたが、目を覚ますと、ジャック・オーは身動きするのも憚られるほどの筋肉痛に襲われていた。声は枯れ、身体を起こすのも億劫だ。横目で彼を探すと、フレデリックも同じように、気怠そうに頭を掻きながら、身体の重さに耐えていた。

「……赤ちゃん、すぐできそう。」

ぽつりと呟いたその言葉に、フレデリックはジャック・オーに振り向く。乱れた赤髪を優しく撫で、労るように口付けを落とした。

「……生命の神秘を、舐めすぎだな。」

それもそうかとジャック・オーは微笑むが、喉の痛み思わず顔をしかめてしまう。空咳が始まった彼女の姿を見やり、フレデリックはゆつくりと身を起こした。

「……ホットレモンでも用意するか？」

「……蜂蜜もお願いね、旦那様。」



↑こちらのQRコードからコメントを送ることが可能です。
簡単な一言でも感想を頂けると
非常に励みになりますので、是非よろしくお願い致します!

【shape of love, baby】

サークル名：Gisele

PN：ume

発行日:(初版)2025/12/30

連絡先：magnolia0136@gmail.com

Twitter:@okum_00

印刷会社:株式会社サングループ/SUNGROUP

- この本は成人向け(R18)作品です。
18歳未満の方の閲覧は固くお断りいたします。
- 無断転載・複製・複写・Web上への掲載
(SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む)は禁止です。
- 二次創作をご存じない一般の方や、
関係者様の目に触れぬようご配慮お願いします。
- 公共の場での閲覧はご遠慮ください。
- 転売は禁止です。
ネットオークション、フリマアプリでの転売はご遠慮ください。

○この漫画の著作権は(Gisele/ume)にあります。
この漫画を当サークルの許可なく
インターネット上にアップロードはする行為は犯罪です。(著作権法23条)
10年以下の懲役もしくは1000万円以下の罰金、
またはその両方が同時に科せられます。(著作権法第119条第1項)